

烏森トレッキング回想記

第三回

日時：'98. 10. 31 (土) ~ 11. 1 (日)

概略行程：

- 1日目 奥多摩駅～奥多摩ビジターセンター～氷川キャンプ場～奥多摩湖ドラム缶橋
～小河内ダムおごうち～奥多摩駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊／登奈利荘
- 2日目 御獄神社～長尾平～御岳平～御岳溪谷～小澤酒造～澤乃井園～沢井駅

メンバー：齋木、米本、吉川、磯崎

齋木会頭の参加を得、“晩秋の奥多摩水紀行”と洒落る。

今回は、初めて好天に恵まれ、空澄み渡り、陽柔らかな青梅線の終着駅／奥多摩駅で待ち合わせ。

東京都の最高峰、「雲取山」への基点駅でもある駅前広場は、大きなザックを抱え衣装を凝らした登山客で賑わい、向かう先はそれぞれも、好日の始まり風景に満ち溢れる。

【余談8】「好日」と云う表現は、学生時代の記憶を懐かしがって使用したものである。

当時の山岳雑誌あちこちに、「好日」と言う言葉が溢れ、「好日山荘」と云う登山用品店の広告が印象に残る。

ログ・ハウスに憩う男女二人の周辺には、眩しいばかりの山用品が並べられ、中には使途すら不明な物もあった。

最近の雑誌でも、「コウジツ」、「K o u j i t u」と言う言葉を含め、時折見掛けられるが、現在の主役言語は、やはり、「トレッキング」であろう。

駅前、「奥多摩ビジターセンター」を覗いた後、急流が水括る氷川溪谷に竈を立て、醤油味の「魚鍋」を炊さん、さすが会頭、竈の造作に詳しい。

久し振りの野外調理であるが、肌寒さが残る時候も助けとなり、まずまずの味付けと自讃するも、量が過ぎて食べきれず。

隣竈の娘さんに勧める強者居るも、“ノーサンキュー”。親父のつついた鍋は、彼女等のメニュー、「スパゲッティ」に合う合わないの問題では無さそうである。

予定のバスを見送り、タクシーで奥多摩湖中程の浮き橋、「ドラム缶橋」に向かう。

湖畔の道は、右手に、「鷹ノ巣山」、「雲取山」へと連なる「石尾根」山麓の岩壁が迫り、左手には、紅葉間近かな広葉樹の疎林が続き、なんとも爽やかなドライブ・コース。

狭い車内にお腹をすぼめ、“やはり、座の高いバスからの眺望が一層優る”と、一人勝手に講釈挟む。

【余談9】奥多摩地区のバスとタクシーの料金相関は、前者の割高が目立つが、おおよそ4名対1台の釣り合いである。

以前早朝の御岳駅で、女性ハイカー2名から、「ケーブル下」迄の相乗りを誘われたことがある。

歩きを楽しむ道ではないが、(なに！第一回ではわざわざ予定を変更して歩いたぞ!) 急ぐ旅でもないのに、“申し訳ないが、のんびりしたいので、バスで行く贅沢を許して下さい”と若干捻って答えると、内1人がニコリ顔で、“それもいいですね”との即座の返答、笑顔の良さに加え、その頭の回転振りに驚ろいた、楽しい思い出がある。

(えっ、そんなことがあったかい? でもあたしゃ、人見知りするタイプで、相乗りなんか端っから嫌いな性格でねえ。旦那にや悪いが、これ幸いと、あんたの言い分に乘ったんじゃないのかねえ。まあ、いづれにしても、覚えちあいないけど!)

湖上の浮き橋に座り、奥多摩の山並みを遠望する。

正面には、「御前山」(1, 405 m)、右手に、「三頭山」(1, 531 m 日本三百名山)、前回の「大岳山」を加えて、「奥多摩三山」揃い踏み。

橋を渡った向こうには奥多摩周遊道が走り、左手に上ると、「山のふるさと村」から、「三頭山/都民の森」へ、右手へ下れば、「三頭大橋」を渡って新青梅街道に合流し、「山梨/小菅の湯」へと続く。

湖面を渡る風は爽やか、柔らかな陽を浴びながら、浮き橋に座り、届かぬ水面に両脚を揺らす。

会頭の勧めで、しばし苦吟するも、素養の無さは如何ともし難く、季語にも戸惑うお粗末さ。しかし、そうした心境得るが幸いと、一念発句。

風の道 湖面を渡り 橋揺す
浮橋に 湖底を見んと 水面攪き
村人が 歩きし道は 湖(みず)の底

【余談10】今回は案内出来なかったが、ドラム缶橋に降りる道を直進した先には、「小河内神社」が祭祀されている。

囲う林間には著名な松の巨樹が立ち、「クチナシ」の樹か、夏には白い花が匂う。

ダム工事に際し、湖底に沈んだ集落の安寧を祈願し建立されたと記す静かな聖地で、住民の多くは、更に上流、山梨/丹波の里に移ったと云う。

バスで、「小河内ダム」に戻る。

過ぎし昔の水不足時、「しょうがないダム」と揶揄されたこともあるが、今なお、神奈川、

東京の水瓶で、春の桜を絵葉書にする。

先に眺めた「御前山」が南面に迫り、ダム堤を渡りきった先には最もポピュラーな登山道入口。急坂続きの難コースであるが、「カタクリ」が咲く4～5月には、カメラを抱える登山客が列をなし、途中、「奥多摩湖」、「富士山」の撮影ポイントを提供し、山頂近くで、「カタクリ」の群生地へと案内する。

湖畔には人が多く、湖面さざ波見入る人、湖岸の句碑読む人、ダム堤から遙か下方の放水路覗き込む人、と振る舞う姿はそれぞれも、奥多摩の秋を楽しむことに変わり無し。

山麓は紅葉前、標高差約400mの山上は如何と、野暮な自問する人も同様なり。

奥多摩駅へバス移動し、青梅線を御岳へ上る。

御岳は定宿、「登奈利荘」。

今回初めて玄関に、「歓迎 烏森会御一行様」の案内板が掲げられ、それを見たメンバーが、指を差して、はしゃぐ姿が、又、愉快。

変わらぬ歓迎振りながら、今夕の宴席は大広間片隅に間仕切られた小間にて、首座を占有するは、人数勝る中高年の女性グループ。

カラオケと明るい笑い声で我らを圧倒するが、美酒と美味な料理の馳走に、いつの間にかそれらも放念、楽しい宴となる。

翌日は快晴、山上は懸念吹き飛ぶ紅葉の真っ盛り。

先ずは天然記念物の巨樹、「神代樺」^{かみよけやま}を背に笑顔を撮る。相当の老木にて枝葉決して豊ならずも、彩り振りは若木に遜色無し。

陽光が降り注ぐ参道を歩き、武蔵御獄神社への石段を上る。

総数400段とも脅し（実際は320段内外）、急な無神論者や病人を輩出するとも云われる急階段であるが、頭上の黄葉、紅葉余りに見事で、気付かぬ内に一気に登る。（あれっ！どこからか、“冗談言うな”との怒号が…、気のせいかな？）

長尾平も、樹々の数だけ綾を織りなす色模様。抜ける青空をキャンバスに、秋彩色を透かし見る。

下山後、御岳溪谷沿いの遊歩道を沢井に歩き、小澤酒造の「澤ノ井」醸造工程を見学。手慣れたガイドに眠りを誘われるが、無事、土産の一合瓶酒を頂戴する。

溪谷沿いに造られた「澤乃井園」に移動し、館内で、「澤ノ井」の試飲を楽しんだ後、庭に設営された屋根付きの木テーブルで遅い昼食。

対岸の「寒山寺」^{かんざんじ}とを、「楓橋」で繋ぎ、エメラルド色の溪流を樹枝で覆う趣向見せるも、
何故か、昼食メニューはビールと蕎麦。